



世田谷歩コリズム ～まちの骨格を再考する～

■ Problem

暮らしの視点 [待機児童・高齢者]

世田谷区の暮らしの問題として待機児童や高齢者の居場所の問題が挙げられる。待機児童は23区内でワーストワンの1109人となり、深刻な問題となっている。また高齢者も日常的な交流の場が少なく、外に出る行為自体が減少している。そこで再生した川沿いに子ども+高齢者の集会場を設ける。前庭で作物の栽培を通じた地域コミュニティの場として機能する。またカフェを併設し、収穫した野菜を提供することで、一般客との交流の場にもなり、日常生活に実り時間を与えることができる。カフェの収益は作物栽培の資金や、家庭菜園のための野外教室イベントなどの経費として活用され、地域コミュニティの格として機能していく。

■ Diagram



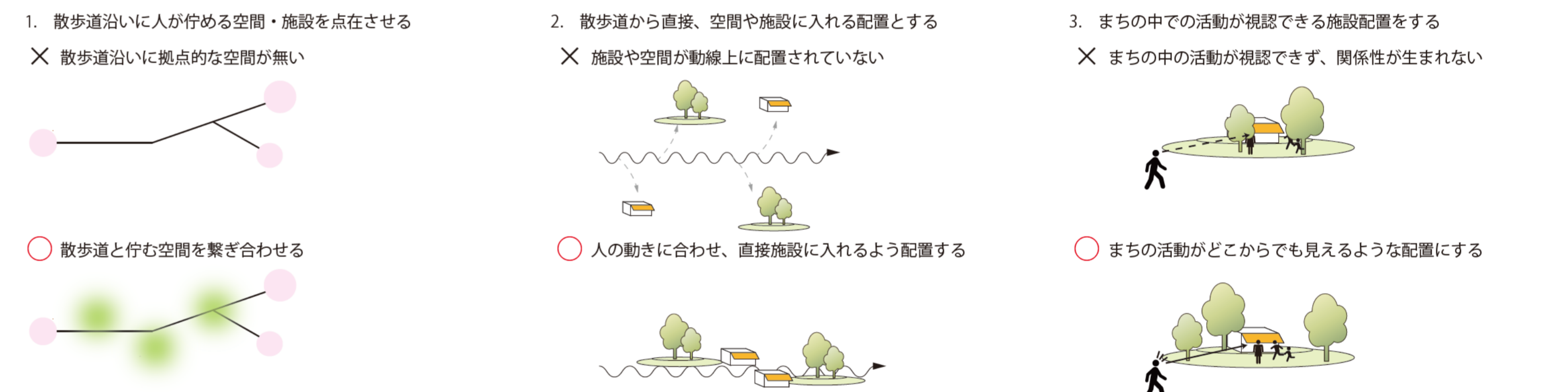
・現在のまちの骨格
世田谷区の現在のまちの骨格は、環状七号線や環状八号線に加え、世田谷通りや玉川通りなど車の通行が優先権を持った道路が形成している。地域間の分断に加え、歩行者の空間が十分でない状況になっている。

・まちの履歴
世田谷区の履歴に目を向けると暗渠化された河川や旧街道が網の目のように地域を覆っていることがわかる。これを地域のバスと位置づけ、歩行者がまちに溢れるための散歩道として整備する。暗渠化された川を再生することで、世田谷に緑と水面を取り戻す。

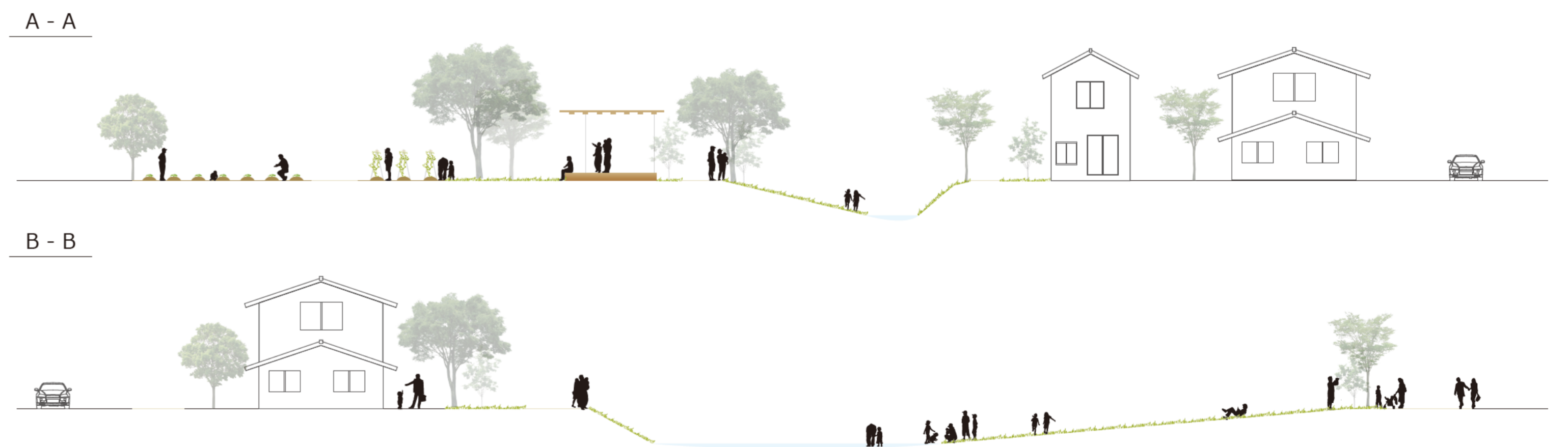
・生活施設の分布
日常的に利用する駅や商店街、広域避難場所に指定されている学校や公共施設が区域内に点在している。これらの施設をネットワーク構築のノードとして捉えることでバスと連動した施設配置が可能となる。

・新しい世田谷の骨格
まちに存在するバスとノードを繋ぎ合わせ、新たな世田谷の骨格を形成する。幹線道路により分断されていたまちが、ネットワークの構築により、歩行者が豊かな空間を獲得し、人がまちへ溢れる地域へと変化していく。

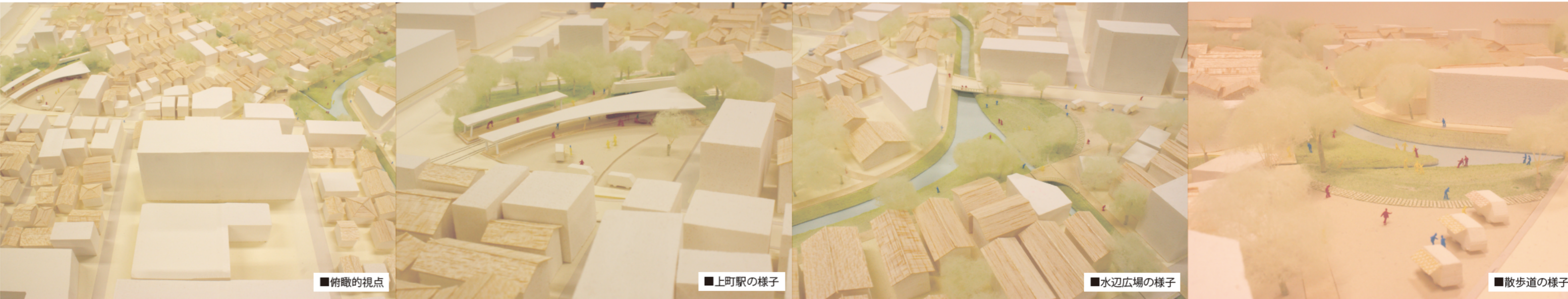
■ Design rule



■ Section S=1:300



■ Scene



環境の視点 [緑被率・暗渠]

都市部ではヒートアイランド現象が深刻な問題として取り上げられており、地域として取り組むことが必要とされている。世田谷区は、都内でも緑被率の高い地域であり、中でも民有地が65%を占めるなどの特徴のある地域である。しかし、緑被率は土地の細分化による建て込みにより減少傾向にあり、世田谷の特徴的な資源が失われる可能性もある。そこで世田谷の地下には暗渠化された河川が十数箇所も眠っており、河川再生と合わせて地域の緑を取り込んでいくことで、大きな波及効果を世田谷区全域にもたらすことができる。この緑と水面で構成される線的な空間を利用し、世田谷全域を散歩できるように散歩道の整備も同時におこなうことで、住民の健康面への効果に加え、良質な住環境を提供することが可能となる。

■ Concept

人が歩くまちこそ、まちに人が集うと考えた。日常的に利用する駅や商店街と、広域避難場所に指定されている学校や公共施設を繋ぐように世田谷区全域に散歩道で繋がるネットワークを構築する。過去の世田谷には多くの川が流れていたが、今では大部分が暗渠化され水面が見えなくなっている。また農村地帯の名残から旧街道はヒューマンスケールな規模の道が残存している。これらまちの履歴をシンボルとして利用し、日々の暮らしを繋ぐ整備をおこない、世田谷区の骨格を歩行者主体へと変化させる。世田谷区民は歩くことで健康と豊かな生活を得ることができ、世田谷地域はまちの緑を取り込んだ河川空間を獲得することができる。

■ Introduction

かつて日本の賑わいは、街道沿いの宿場や社寺仏閣を中心に広がり、まち並みを形成してきた。今では商店街として残る場所もあり、またオープンスペースとしては路地が使われ、井戸端会議や子どもたちの遊び場として利用されていた。しかし、高度経済成長による車社会の発達により歩行者の自由な移動を制限され、歩行空間の生み出した賑わいの場が失われた。まちなかをゆったりと過ごしながら歩けるまちは、人との距離が近く、まち全体ににぎわいを感じられる。歩行者優先の都市計画は地域経済の発展を促す戦略となりえるため、歩行空間とまちのつながりを再考する。これまで虚けられてきた歩行空間が侵略を始める時である。

■ Plan S=1:500

